

県立西都原考古博物館中期運営ビジョン評価表（平成30年度）

評価欄の数値は4段階評価

内部評価 4 … 達成できた 3 … ほぼ達成できた 2 … あまり達成できなかった 1 … 達成できなかった
 外部評価 4 … 期待以上できた 3 … ほぼ期待どおり 2 … やや期待を下回る 1 … 改善が必要

※（ ）内は前年度実績

(1) 調査研究

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策		個別	総合	評価・意見
調査研究	論文等の執筆、研究発表等	年1回以上	学芸普及担当の職員が年1回以上の執筆・発表を行った (同上)	<ul style="list-style-type: none"> 東 論文等5本 発表等5回 田中 論文等1本 発表等3回 堀田 論文等5本 発表等0回 谷口 論文等2本 発表等0回 加藤 論文等3本 発表等1回 永友 論文等2本 発表等0回 留野 論文等3本 発表等1回 	-	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究を深めている様子がうかがえる。これからも尽力して成果を後世に残してほしい。 ○ 調査研究活動の柱として位置付けている地下レーダー探査が継続され、有益なデータの収集が出来たこと、他館との連携の事業の成果として冊子「玉—古代を彩る至玉—」が刊行できたこと、国内外の機関との連携できたことを評価したい。 ○ 多忙な業務の中での学芸員諸氏の懸命な調査研究に対して敬意を表したい。 ○ 今日のように政治的対立によって日韓関係が悪化する事態が起きると、当館の国外の研究者との交流や、年1回の国際交流展の意義がクローズアップされる。政治・経済の状況に左右されず、これまで通りの着実な歩みに期待したい。 	3.8

(2) 収集保存

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策		個別	総合	評価・意見
鉄製品・古人骨・土器・石器等	鉄製品の保存処理件数	年50件以上 (外部委託を含める)	66件 (68件)	<ul style="list-style-type: none"> 鉄製品 内部処理 60点 外部委託処理 6点 計 66点 	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 古墳文化における鉄製品の持つ意味の大きさが明らかにされつつある。鉄製品の収集・保存は、その調査・研究とともにさらなる充実が期待される。 ○ 人骨について、研究紀要で報告できた点を評価したい。 ○ 目標の数値にあまりにこだわらないことを望みたい。 ○ 収集した図書・写真をデータベース化して、ホームページ上で公開したら如何であろうか。 	4.0
図書・写真等	収集・分類・登録件数	年1,000件以上	1,460件 (1,765件)	<ul style="list-style-type: none"> 図録登録数 820件 写真登録数 640件 計 1,460件 	4		<ul style="list-style-type: none"> ○ 図書については、各研究機関が刊行した一般寄贈図書761件、個人による寄贈本56件および購入本3件の登録を行った。 ○ 写真については、発掘調査の記録写真の撮影フィルムをスキャンし、デジタルデータ化する作業を継続して行っている。今年度は西都原46号・47号・202号墳の写真を中心に登録を行った。 	

(3) 展示

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価		外部評価			
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価	
入館者	入館者数	年12万人	109,559人 (129,278人)	<p>※ 入館者数は昨年度より減少となり、目標に達しなかった。引き続き、一人でも多くの方に来館していただけるように、興味・関心を喚起し、感動を与えられる展示を行っていきたい。</p>				<p>(入館者数について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 11万人弱の入館者があったことを評価したい。 ○ 数多くのすばらしい企画・展示がなされていたが、入館者数が目標に達しなかったのは残念である。一層の努力を期待したい。 ○ 小中高生がどれくらい来館しているのか知りたい。 ○ 時期によって入館者数が変動すると考えられるので、他の情報も併せて検討したらよいと考える。 ○ 年度ごとの増減傾向の記載がない。入館者数の動向が評価の大きな指標となるため、記載項目を検討してほしい。 ○ 年間10万人台は維持しており評価したいが、性別を問わず、幅広い年代の方に博物館の魅力を知ってもらう必要がある。夏期の特別展のような子供が楽しめるイベント性(娯楽性)の高い企画も検討する必要がある。 ○ 展示内容や学術的な価値に比して、入場者の少なさや固定が課題と感じる。公共交通機関の少なさという問題はあるが、不便な所こそ行く価値がある、と思わせる工夫を引き続きお願いしたい。 	
特別展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<p>①特別展「共に生きたもの～ムシと動物の考古学～」 【2018/7/14～2018/9/9 入場者数 21,721人】</p> <p>古来より人と共に生きてきた動物・ムシたちが、人とのように関わりあってきたのか、そしてその関わりが時代によってどのように変化してきたかを紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 身近な動物を展示テーマとして取り上げたことで、考古学に普段馴染みのない層からも興味関心を引くことが出来た。 ○ 動物については、その種類別に展示したことによって、時代による人と動物との関係の変化がより明確になった。 ● ムシについては、考古資料から発見される種に展示を絞ったため、動物に比べ展示資料が少なくなった。 <p>◎ 参考(平成29年度分) 「日向諸県君と葛城氏」 【2017/7/15～2017/9/10 入場者数 20,933人】</p>		-	3	<p>(特別展について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子供達にアピールできる絶好の機会であり、子供にもわかる内容であった。 ○ 地下式横穴墓の副葬品の鉄器にハエ(ウジ虫)のサナギ痕がみられ、そこから葬送儀礼、「もがり」の期間推測が可能となるという指摘がされており、地味な資料であるが考古学のイメージを転換させる興味深い展示であった。 	3.3
国際交流展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<p>②国際交流展「海山に宿る神々～日韓の祭祀遺跡～」 【2018/10/6～2018/12/2 入場者数 15,825人】</p> <p>日本と韓国における海や山の祭祀遺跡を中心に取り上げ、当時の人々が神まつりに込めた思いについて考える機会とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 韓国国立羅州博物館の全面的な協力を得て、韓国三国時代の代表的な国家的祭祀遺跡で日本の沖ノ島との関連も指摘されている全羅北道の竹幕洞遺跡の銅鏡・石製模造品等の出土遺物など、貴重な資料を展示することができた。 ○ 南九州に関連する資料についても、東霧島神社の境内に位置する都城市鳩園遺跡から出土した常滑焼壺などの海や山に関わる祭祀遺物に加え、美郷町神門神社に伝わる銅鏡や高原町狭野神社の所有する神楽面など、これまで間近に見る機会の少なかった資料を借用し、展示することができた。 ● 台風など天候の影響もあってか、入場者数は伸び悩んだ。 <p>◎ 参考(平成29年度分)「台湾鉄器文化の粋 新北市十三行遺跡と人びと」 【2017/10/7～2017/12/3 入場者数 21,244人】</p>				<p>(国際交流展について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 展示の内容に対してメインタイトルがしっかりとこなかった。「信仰」は一般の関心の高いテーマであるだけに期待を抱かせるタイトルであったが大きき括りすぎたきらいがある。 <p>(企画展について)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 企画展Ⅰは、石と人との関わりとその変化についてのわかりやすい展示であった。 	
企画展	実施回数	年2回	年2回 (年2回)	<p>③企画展Ⅰ「石が人を創った～石と人の文化史～」 【2018/4/21～2018/6/17 入場者数 21,309人】</p> <p>身近に存在する素材である石を使用した各時代の道具をとおして、石と人の関わり方とその変化について紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 石の道具だけでなく、民俗資料や鉄器などの比較対象資料の展示も行い、石と人の関わり方について理解しやすい展示と好評であった。 ○ 「田の神さあ」のように現代においても馴染みのある資料を展示したことで、素材としての石について身近に感じてもらうことができた。 ● 展示資料の時期と展示資料の幅が広く、やや焦点が絞りきれなかったきらいがある。 <p>◎ 参考(平成29年度分)「色が語る いにしへの技と心」 【2017/4/22～2017/6/18 入場者数 23,660人】</p>				<ul style="list-style-type: none"> ○ 企画展Ⅱは、考古学の編年の考え方を、実物資料を用いてわかりやすく、現代の生活とつながる形で示したユニークな試みであり、館の基本理念にもかなっている。 ○ 南九州の縄文土器は装飾が控えめであるとの印象を持っていたが、企画展Ⅱでの展示によって、その中にも装飾欲求があることに気づいた。ただし、装飾性が控えめだけに展示台を高くして、見せたい箇所を来館者の視線の高さに合わせたり、背景やライティングで土器の「肌」合いや滑石入りの光沢を際立たせるなどの工夫も出来たと思う。 	

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
企画展	実施回数	年2回	年2回 (年2回)	<p>④企画展Ⅱ「どきを編む ～宮崎県の縄文土器～」 【2019/1/12～2019/3/17 入場者数 11,669人】</p> <p>土器の編年研究の概要について紹介し、宮崎県の縄文土器を編年順に展示して土器の変遷を示すとともに、他地域との交流や、各時期の生活の様相について解説した。</p> <p>○ 近年、県内では縄文土器の良好な資料が増加しており、今回の展示では縄文時代草創期から晩期までの県内出土の代表的な縄文土器を一堂に集めて展示することができた。</p> <p>○ 完形品や形の分かる復元土器を中心に展示したことで、土器の全体の形や文様の変化について理解を深める契機とすることができた。</p> <p>◎ 参考(平成29年度分)「豊と日向 ～日出国の考古学～」 【2018/1/13～2018/3/18 入場者数 15,163人】</p>			<p>○ パネル展「地下を探る」は、専門的、先進的な内容であるが、地道な調査・研究の成果を可視化し、公表することは当館の役割を来館者に理解してもらうことにつながり、また、考古学の最前線を発信することにもなり、有効であると考え。他研究機関や大学に参加を呼びかけた点でも他機関との連携を心がける館の姿勢をアピールできた。</p> <p>(展示全般)</p> <p>○ 最新成果の紹介がなされ、反省点等の吟味がなされている。</p> <p>○ 考古博物館の様々な特性を生かした特別展、企画展等を運営されていると感じる。</p> <p>○ 常設展に加えて、「特別展」、「国際交流展」、「企画展」(Ⅰ・Ⅱ)、「コレクションギャラリー展」、「パネル展」、「通年企画展」など、これほど多くの展示会を行う博物館は他に例がないと思う。一般に、常設展以外の企画・特別展を行うには、相当の準備が必要なので、職員の過重な負担にならないように行っていたきたい。</p>	
コレクションギャラリー展	実施回数	年3回	年4回 (年4回)	<p>⑤コレクションギャラリー展「西都原台地の歴史Ⅰ 旧石器時代」 【2018/6/20～2018/7/8 入場者数 3,489人】</p> <p>◎ 参考(平成29年度分)「修理と転用」 【2017/6/20～2017/7/9 入場者数 4,824人】</p> <p>⑥コレクションギャラリー展「西都原台地の歴史Ⅱ 縄文時代」 【2018/9/12～2018/9/30 入場者数 4,238人】</p> <p>◎ 参考(平成29年度分)「海幸・山幸の世界」 【2017/9/12～2017/10/1 入場者数 4,026人】</p> <p>⑦コレクションギャラリー展「西都原台地の歴史Ⅲ 弥生時代」 【2018/12/5～2019/1/6 入場者数 2,973人】</p> <p>◎ 参考(平成29年度分)「蛇行剣」 【2017/12/5～2018/1/8 入場者数 5,629人】</p> <p>⑧コレクションギャラリー展「西都原台地の歴史Ⅳ 古墳時代とその後」 【2019/3/20～2019/4/14 入場者数 8,840人】 【2018(H30)年度末までの入場者数 4,898人】</p> <p>◎ 参考(平成29年度分)「ものの見方」 【2018/3/20～2018/4/15 入場者数 6,638人】</p> <p>その他の展示</p> <p>⑨パネル展「地下を探る 日本のGPRはどこまで到達したのか」 企画展Ⅱと同時開催【2019/1/12～2019/3/17】</p> <p>開館から15年の節目として、開館準備の段階から主要な研究活動の柱として位置づけてきたGPR(=地中レーダー探査)に関するパネル展を実施した。国内でGPRを実践している10機関と、アメリカ合衆国、韓国の研究者にパネルの制作を依頼し、29枚のパネルを展示した。</p> <p>⑩通年企画展「西都原古墳群の最新調査」 年2回</p> <p>西都原古墳群の保存整備・活用のための事業により実施された発掘調査の最新の調査成果を紹介した。</p> <p>①西都原171号墳 ②西都原169号墳</p>	—	3	<p>○ 展示会に関する書物・図録等は「特別展」以外には刊行されないのが残念である。特別展の図録ほどの内容は望まないが、簡便にまとめた要旨と写真などをまとめたカタログ的なものがあると、見学者により深い理解を提供できると思う。</p>	3.3

(4) 情報発信

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
広報活動の充実	報道機関への情報提供回数	年12回以上	年19回 (年16回)	<p>報道機関への情報提供 ・展示会(7回)、講演会・考古博講座(6回)、体験・実験講座(5回)、考古博少年団(1回)</p> <p>○ 情報提供を受けて、報道機関からの取材や問い合わせが多くあった。(報道取材報告書18件) ○ 教育機関76か所、生涯学習施設4か所、ホテル等27か所、福岡市6社を含む旅行会社16社を訪れ、団体での利用についてPRを行った。 ● ポスター・チラシの完成が遅れたため広報の時期がずれ込むことがあった。</p> <p>※ 適切な時期・期間の広報を行うために、配布物の完成が遅滞することのないよう進行管理を行う。 ※ SNSの活用など、広報手法を多様化する。</p>	-	4	<p>○ SNSを効果的に使うことで世界につながると思う。</p> <p>○ 環境がよいので、「デースポット」や「パワースポット」などでPRしてはどうか。</p> <p>○ 広報活動の成果(アウトプット)は、認知度の向上と入館者数の増であるため、状況を正確に評価できる評価指数の設定について検討が必要である。</p> <p>○ 当館の来館者はコアな関心を持っている人が多く、そういう方は自らインターネットを使って情報を求めてくるから、ホームページを適宜更新していれば、問題はない。しかし、そうではない子供や高齢者、コアな関心を持たない人にとってはポスター・チラシはいまだに重要な広報ツールと考える。例えば、私の最寄りの佐土原図書館には総合博のカレンダーや展覧会チラシは配布されるのに、当館のそれはない。少量でもいいので、各市町村の主な図書館には配布されるのが望ましい。</p> <p>○ 内部評価にあった配布物の遅れも感じたことがあった。配布にいたるどこかの過程で人手が不足していると推察される。</p>	3.8
博物館ホームページの充実	更新回数	月2回以上	年50回 (Facebook更新96回)	<p>博物館ホームページ等の更新回数 ・ホームページ 年50回の更新 ・その他、Facebook 年96回の更新</p> <p>・ホームページのアクセス数 年1,943,575件 (平成29年度 1,844,546件)</p>				

(5) 教育普及

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
生涯学習の一環としての教育普及活動	講演会・講座の実施回数	年15回以上	年16回 (年16回)	<p>教育普及活動 ・講演会(特別展・国際交流展関連) … 年2回(7月、10月) ・考古博講座 … 年5回(5月、8月、11月、2月、3月) … ・体験・実験講座 … 年6回(6月、9月、10月、12月、1月、2月) ・教員対象講座 … 年1回(8月) ・小・中学生対象講座 … 年1回(7月) ・考古博物館少年団 … 年1回(6月～3月の年間10回の活動)</p> <p>団体予約件数 338件(平成29年度 385件)</p> <p>○ 体験・実験講座参加者へのアンケートでは、講座の内容に関して「満足」および「おおむね満足」と回答した方が9割を超えた。 ● 講演会・考古博講座については、リピーターも増え、関心の高まりは感じられるが、参加者数の少ない講演会や講座もある。 ● 体験・実験講座については、火などを扱う製作体験であるため少人数の募集とならざるをえず、参加できない希望者もいた。</p> <p>※ 講座や古代生活体験館の体験メニューについて、昨年度までの検討も踏まえ、内容や実施回数など具体的な魅力向上の改善策をまとめる。</p>	-	4	<p>○ 市町村の生涯学習関係課にも出向いて、成人教育(女性学級、高齢者教室等)の人達に来館していただけるように呼びかけてほしい。古代生活体験館には大人でも楽しめるメニューがたくさんある。</p> <p>○ 子供達にとって貴重な文化財に親しむための機会となっている。職員やボランティアの方々のわかりやすい説明で子供達の課題解決に大いに役立っていると評価が高い。</p> <p>○ 小中学生のうちに博物館活動に多く参加して、もっと関心を高めてほしい。</p> <p>○ 今後、特に中学生の来館が増えるように講座や体験学習を工夫していただきたい。</p> <p>○ 秋の遠足で園児を連れて行くのが楽しみである。雨天時でも対応していただけるのでありがたい。</p> <p>○ 特に宮崎大や南九州大などと、中・高・大連携を増やしていくことで、若い方の興味・関心が高まると思う。</p>	3.5

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価			外部評価	
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
学校教育との連携	講演会・講座の実施回数	年15回以上	年16回(年16回)	<ul style="list-style-type: none"> ・教員対象講座(8月) 参加者3名 ・小・中学生対象講座(7月) 参加者7名 ・博物館実習(8~9月) 参加者3名 *大学2校 ・県庁インターンシップ(8月) 参加者3名 *大学3校 ・インターンシップ(7月、10月、3月) 参加者9名 *高校3校 ・職場体験学習(7月) 参加者6名 *中学3校 ・県立西都商業高校による「課題研究」(6月~10月) 商業科専門科目として実施する「課題研究」の一環として、本館との連携により生徒が館内で実習を行った。商品開発の3つの班に分かれてチラシ製作や商品としての勾玉製作などに取り組んだ。 <p>学校関係の予約件数 134件(平成29年度 148件)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 義務教育世代を対象とした小中学生対象講座や考古博物館少年団活動は、出席率も高く、積極的に活動していた。考古学への関心も高まったと感じられた。 ○ 6~7月に西都市内の小・中学校や県立学校を訪問し、全児童・生徒に古代生活体験館の体験メニュー及び特別展のチラシの配付を依頼し、夏季休業中の利用促進を図るとともに、学校行事や研修会等における当館の活用を直接お願いした。 ● 教員対象講座は受講者が少なかった。募集対象を広げたが学生の参加はなかった。 <p>※ 学校関係の利用促進について、魅力ある展示・講座等の検討や、あらゆる機会をとらえて活用をお願いするなどの取組を継続的に行う必要がある。</p> <p>※ 教員対象講座については、国立科学博物館等との共催で(公財)宮崎文化振興協会宮崎科学技術館が開催する「教員のための博物館の日in宮崎」に出展することで継承していく。</p>	-	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校教育関係者として、もっと博物館の活用について考えていくべきと反省している。 ○ 西都市内の小・中学校を対象に行っている体験メニューや特別展のチラシの配付を、もっと広範囲のもっと小・中学校を対象に行ってもよいのではないかと。特に夏季休業の前には県北や県南の学校にも大いにPRしてほしい。 ○ 地元高校との連携は大変よい取組と感じる。当館の地勢・位置、特性から、教職員に利用してもらうことが第一歩であろう。 ○ 多様な活動に敬意を表したい。特に、学校教育との連携は他に例のない先進的な取り組みと感じる。なかなか参加者の増加がみられないのは、前例のない取り組みのためと思われる。これからも多くの情報を発することによって事態が進展する可能性があると思う。一層の努力を期待したい。 ○ 教育普及活動は熱心ではあるが、期待を超えるものではなかった。 ○ 学校教育との連携について、前年度より予約件数が減少している。学校サイドとの顔の見える関係づくりが重要。引き続き、訪問活動などの取組の充実を図ってほしい。 	3.5

(6) 経営

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価			外部評価	
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
県民等からの意見の反映				<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年を通してアンケートを実施しており、平成30年度も11月中旬から12月中旬の1か月間をアンケート月間として回収強化に努めた。なお、今年度よりアンケートの設置場所に古代生活体験館も追加し、設置場所を4か所に増やした。(回収件数322件)アンケートの記載内容については、展示方法やボランティアガイドに対して評価する声が寄せられている。また、3階ラウンジ「眺」を評価する声も複数寄せられている。 ● 「順路がわかりにくい」「展示室が暗い」という意見が寄せられている。 <p>※ 順路や展示室の照明については、受付や館内での解説などの機会をとらえて、本館の施設の特徴や展示のねらいについて十分に説明を行うこととしている。特に、配慮が必要と考えられる観覧者には、受付において注意喚起を行い、通常の入り口であるスロープ以外に、エレベータで1階の展示室に入ることもできることを説明するなど対応をとっている。</p>	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「(6)経営」については、数値目標の設定がなく、客観的な評価ができない。少なくとも1項目は必要。一例を挙げると、「県民等からの意見反映」の項目では、アンケートの回収率や意見の反映事項・改善点の実施項目数など、また「県民等との協働」の項目では、NPOや団体との協働によるイベントの開催回数や参加者数などが考えられる。 ○ アンケートの回収件数が、入館者数に比べてあまりにも少ないのではないかと。何らかの改善策が必要と考えられる。 ○ 順路がわかりづらく、暗いとは思いますが、イメージ的には薄暗い方がいいと思う。 	3.2
県民等との協働	-	-	-	<ul style="list-style-type: none"> ○ NPO法人(iさいと)と協力して、ミュージアムコンサートや「銅鏡チョコをつくってみよう!」体験、「西都原 秋のお茶会」、県内クラフト作家による「博物館 de マルシェ」(春と秋の2回開催)などのイベントを開催した。 ○ 「博物館 de マルシェ」の10月の開催時には、地元の音楽イベント「BRASH」が同時に催された。企画段階から「BRASH」の実行委員の方々とは打ち合わせを重ね、当日は若い方を中心とする約500名の参加者が集まった。これまで当館にあまりなじみのなかった客層に向けて当館の存在をアピールする機会となった。 <p>※ 今後も、NPO法人、西都原ボランティア協議会や西都市・児湯郡の関係団体と連携し、地域の方々に認知され、活用していただける施設となるように努めたい。</p>	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンケートで直接、声を聞ける取組みはいいと思う。「展示室が暗い」という意見については、照明を落とすことで重みが出たり際だったりする展示手法であり、視線が自然にそちらに向き、興味がわく方法だと思う。 ○ 初めて足を運んだときに、確かに順路がわかりにくい、と思う。「どうまわるべきか」迷っている方に幾度か出くわしたことがある。 ○ 毎回、出口がわかりにくく、迷う。緊急時が少し怖いので案内表示がもっとあったらいいと思う。 ○ 「博物館 de マルシェ」は、新たな客層をターゲットとした素晴らしい取組であり、今後、できる限り充実させていくべきと考える。また、全県的な広報も必要であり、観光協会のHPなども活用してほしい。 	3.2

項目	評価指標	目標値	平成30年度実績	内部評価			外部評価	
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
職員の 資質向上				<ul style="list-style-type: none"> ○ 全職員を対象にコンプライアンス、人権、情報セキュリティ、交通安全に関する研修等を実施した。 ○ 県外研修として、古代文化歴史研究、古代生活フェスティバル、九州博物館協議会等に参加し、研鑽を深めた。 ● 研修成果については、文書による復命のみとなった。 <p>※ 今後も研修等の機会を確保するとともに、文書での報告だけではなく全体会などの機会を用いて職員間で情報を共有する。</p>	3		<ul style="list-style-type: none"> ○ 案内ボランティアの方の話はとて面白いと思う。 ○ 危機管理意識の高揚に意欲的に取り組まれている。今後も継続してほしい。 ○ 日常的な取組、意識改革が行われている。サービス業的な視点も取り入れながら、愛される館の運営をお願いしたい。 ○ 開館してからすでに20年を経て「県民などからの意見」などを参考に、展示方法や環境に関して今一度検討してもよいのではないか。 	
危機管理 体制の 強化				<ul style="list-style-type: none"> ○ 年度初めに危機管理マニュアルを全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)に配付し、危機管理意識の向上を図った。 ○ 11月には、南海トラフ巨大地震を想定した県民一斉防災行動訓練に参加し、館内での安全確保行動に係る訓練を実施した。 ○ 県が主催する普通救命講習を職員2名が受講し、AEDの使用方法や応急手当の方法について学んだ。 ○ 3月11日の休館日に、防災総合訓練として全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)を対象に、震度6程度を想定した避難誘導訓練を西都市消防本部職員立ち会いの下、実施した ○ 新たな試みとして、展示室の照明を落とした避難誘導や、トランシーバーを使用した訓練を実施した。 また、防災総合訓練に加えNPO法人iさいと共催で西都市消防本部職員による救命法講習を実施し、宮崎福祉医療専門学校卒業生をサポート・スタッフに迎え、心肺蘇生法やAEDの使用方法について実技研修を行った。 ○ 3月17日(日)の午前10時15分に展示室を含む館内で停電が発生した。停電時に入館者が1組あり、非常灯が点灯している間に職員が館外に誘導した。午後1時過ぎには復旧している。避難誘導訓練が活かした事例であった。 <p>※ 職員一人一人が、常日頃より危機管理意識を持っておく必要があるため、今後も訓練や研修・講習を通じて職員の防災、危機管理に対する意識の高揚に努めたい。</p>	4	3	<ul style="list-style-type: none"> (全体として) ○ あらゆる方が来館の対象者と考え、幅広く来館者を想定して運営していくことが肝要であろう。 ○ 展望ラウンジに立つだけで、「この空間が好きだ」と思う。来館したくなる展示に知恵を絞り、情報発信に人手をさき、安心安全に心がけて、これからもいきいきとした空間をつくりだしていただきたい。 ○ 考古学は地味な分野であり、教育普及が必須。 ○ 館への交通機関については難しい問題であるが、知恵を出し合って検討してほしい。 ○ 西都原の中心にあるこのはな館より奥に位置するため、県民でも館の存在や場所がわからないと聞く。花の時期に西都原を訪れた観光客が足を延ばすように、ポスターや案内等で周知したりスタンプラリー等で知っていただく工夫があるといい。博物館はゆったりと歴史を学べ、体験館は子どもたちも興味を持って楽しめる空間なので、もっと多くの方に知っていただきたい。 	3.2
施設・設備 の管理				<ul style="list-style-type: none"> ○ 施設・設備の老朽化が進んでおり、小規模な修繕は予算の範囲内でその都度行い、大規模修繕については膨大な予算を伴うため、関係機関と協議を行いながら計画的に修繕・改修を実施した。平成30年度は、浄化槽、氷蓄熱チラー、エレベーター等の補修を行った。 ● 酒元ノ上横穴墓遺構保存覆屋の屋根がシロアリの被害にあい、昨年度より閉館の措置をとっている。 <p>※ 関係機関と連携を図り、年次整備計画に基づきながら効率的な修繕改修を行う。</p> <p>※ 酒元ノ上横穴墓遺構保存覆屋については、本年度から応急処置と遺構養生を開始する。</p>	3		<ul style="list-style-type: none"> ○ このはな館と館の間の道は特にわかりづらく、台風後は倒木も多くみられる。市と連携を図り、道の整備等はできないか。 (中期運営ビジョンの評価に関して) ○ 評価数値の説明が内部と外部で一部異なり、また、総合博とも異なるので、総合博とも整合がとれるようにしていただきたい。 ○ 評価活動が業務の妨げにならないことを望む。特に、数値を掲げることがふさわしい活動と、そぐわない活動があることに十分配慮されることと、数値だけでなく、質(クオリティ)を評価していく方向も検討されることを希望する。 ○ 外部評価を受け、協議会で事業評価として意見を集約した後に、HP等を利用して県民に公表してほしい。 	